

The Voice of Mission



アルメニアのある教会での聖餐式礼拝

霊性は日常の歩みで練られる

"わたしはモーセとともにいたように、あなたとともにいる。
わたしはあなたを見放さず、あなたを見捨てない。"

ヨシュア記 1章5節

ミッション・宣教の声 主幹
黒田 禎一郎



霊的な人とは、どんな人でしょうか。預言や異言を語る人でしょうか。パウロは、私たちのからだを生きた供え物として捧げることと言いました(ローマ12:1)。霊性は日常の日々を通して練られ、日常生活を通して現れます。

ヨセフは奴隷として売られましたが、絶望の淵から新しい歩みへと霊性が練られていきました。無実の罪で投獄され、閉ざされた状況で、開かれた天を見上げ、囚人たちの歩みを経て霊性が練られていきました。度重なる苦難の歩みこそが、生きた供え物として捧げられた土台でした。ダビデは羊を飼っていた時も、ゴリアテの前に立った時も、バテシエバとの間に生まれた最初の子が死んだ時も、日常の生活の中で起こりました。その人にとって、事の大小や損得でなく、神が置かれた日常生活に没頭する時に霊性が練られていくのです。

南アフリカのマンデラ元大統領は、牢獄で27年間過ごしましたが、牢獄は彼を破壊できませんでした。これは、かつてシベリヤの強制労働収容所に送られた聖徒たちも証言する事実です。人生で最も偉大な栄光は、一度も失敗しないこと

ではなく、失敗するたびに再び立ち上がるにあります。悲痛や苦難の日々が、人の霊性を練り上げていくのです。そして美しい波紋を起こします。

私たちが置かれた日常の生活は、神が与えてくださった驚くべき霊性が練られる現場です。その日常生活から逃れてどこかへ行ったとしても、神から逃れることはできないと知っているならば、今ここにある現場こそが最高の霊性訓練の場であることに気づかされます。私たちの一挙一投足が神の目には映っています。日々の人生のすべての瞬間が、私の霊性が練られるための最高の瞬間です。

ですから、日常の生活に押しつぶされるのではなく、置かれた日常生活に没頭(忠実・従順)する歩みが大切です。日常生活の霊性が練り出す美しさ、そこから放たれる香りが神の国の証しとなります。主は日々の歩みの中で、「わたしはあなたを見放さず、あなたを見捨てない。強くあれ、雄々しくあれ。」(ヨシュア記 1:5,6)と、語っておられます。今、あなたに何が求められているのでしょうか…。

子ども伝道の大切さ

駐在員家族にとって、子どもの教育は大きな関心事です。アメリカ滞在中にアメリカならではの体験をさせたい(また自分たちもしたい)、という両親の願いに応えることのできる教会のイベントは人気です。プロの黒人ミュージシャンが指導するゴスペルワークショップだけでなく、子どもたち対象の夏のバイブルキャンプ、クリスマスに行われる親子クリスマス礼拝などには、たくさんの親子連れが足を運びます。子どものころに聖書のお話を聞き讃美歌を歌った体験が、大人になってから教会へ導かれるきっかけとなる例は日本でもめずらしくありません。少子高齢化が進む日本の教会に、新しい世代が長期的に加わっていくためにも、NYで毎年たくさんの子どもたちに福音と賛美音楽に親しむ体験をしてもらい、日本へ送り出すという活動は大変意義深いものだと思っています。



親子クリスマス会

帰国後の教会離れが起きないために

せっかくアメリカの教会で受洗しても日本へ帰国してから日本の教会につながらないというケースが起きないための取り組みも行ってきました。決心者に対する受洗準備クラス、アフター・バプテスマ・クラスに加え、帰国が近い方のための帰国後教会生活準備クラスも個別に行いました。また、帰国準備が整い最後の主日礼拝となる教会員には、「送別会」ではなく「派遣式」を執り行い、祈りとともに送り出します。新しい任地で、主に仕える者としての使命を果たしていく、という自覚を深めていただくために。また、帰国後も近隣の教会でお勧めできる福音的な教会を紹介しつつ、教会生活に関していつでも相談に乗れる体制を提供しています。

異文化理解の一助としての伝道

英語やアメリカ文化を学ぶ必要を感じている駐在員の奥様を対象に行う、「英語で学ぶバイブルクラス」も人気でした。有名で興味深い聖書箇所から英語特有の慣用表現などを学び、さらに福音の核心まで触れていきます。クラス終了後はNYで生活する者ならではの苦労話や、生活のヒントを分かち合うひとりで盛り上がりました。

アメリカならではの危険も

一方、アメリカならではの危険も体験しました。それは、日本人女性に対し異常な性的執着を抱くアメリカ人の存在です。ある時から日本語を片言話すアメリカ人が、熱心にNYめぐみ教会の礼拝に参加するようになり、奉仕も積極的に手伝ってくれるので皆喜んでいたのですが、ある日教会の

グループラインでその本性を現し、暴言と脅迫の投稿が止まらなくなり、一同恐怖に震えるという事件が起きました。アメリカ人牧師のアドバイスで地域警察に迅速に介入してもらい、今後教会の敷地内に立ち入るならば通報され逮捕されるという警告が出されました。彼はその後、他地域の無牧となった日本人集会へも入り込もうとしましたが、この一件がシェアされていたので事なきを得ました。アメリカ生活が長い永住者によると、この手のアメリカ人異常者は決して珍しくはないとのこと。誰もが銃を携帯し得ることとあわせ、アメリカ社会で暮らすことのリスクと、万一の場合の対応を考えておくことの重要性を、改めて実感させられた出来事でした。

日本人宣教師の働きに立ちはだかる困難

やがて帰国する多くの求道者に、福音の種を蒔く邦人宣教活動の意義は計り知れません。一方、アメリカならではの危険、とどまるところを知らないインフレ、日本との物価水準の乖離、さらに最近はグリーンカードをはじめとする長期滞在のためのビザ取得が、非常に困難になるという壁が立ちはだかるようになりました。私自身も宗教活動家ビザ(R-1)で渡米後米国永住権を申請したものの、R-1ビザが失効する時期になっても、なお審査が始まるまで何年もかかるという、異常事態のため帰国を余儀なくされました。

それでも継続されていく邦人宣教

しかし、私が牧会していたNYめぐみ教会のメンバーたちは日本人牧師不在となった今も、現地のアメリカ人教会の協力を得てゴスペル・ミニストリーをこれまでどおりの規模で継続しています。週に一度のオンラインバイブルスタディ、家庭集会なども信徒リーダーが立って継続されています。かつて初代教会時代に、使徒たちが行った宣教活動は信徒たちによって引き継がれ、それがその後の世界宣教の礎となりました。聖霊の働きは牧師・信徒という立場を超え世界規模で宣教協力活動を支え続けます。無牧の群れが多くなったNYの日本人教会ですが、時代を超えて継続されていく、その主のみわざのために、今後も日本から関わらせていただきたいと願っています。

(つづく)

伝道、プレゼントにもおすすめです。

聖書の集い・連続メッセージ
「讃美歌詩・聖歌詩の背景から学ぶ信仰」

その時、わがたましいは歌う

多くの人たちに親しまれている讃美歌詩・聖歌詩の背景にある作詞者の信仰に焦点をあてる励ましのメッセージ集です。

第1巻～第10巻 刊行 中綴じB6サイズ ¥500(税別)

ご注文は「ミッション・宣教の声」事務局まで。

主幹 黒田 禎一郎

前号において、アルメニアの文化的背景と、今日まで伝道活動に影響を与え続けている苦しみについて考えました。今回は、こうした困難な状況下の伝道活動についてご紹介します。

長期的影響を及ぼした悲劇

1988年12月7日、アルメニアはさらなる恐ろしい悲劇に見舞われました。マグニチュード(M)6.8の地震がスピタク、ギュムリ、ヴァナゾールなどの都市や周辺の数十もの村を部分的、あるいは完全に破壊しました。公式発表によると、この日約2万5000人が死亡し、1万3000人以上が負傷しました。そして50万人以上の人々がこの日、家族、家、財産など、持っていたすべてを失いました。ヴァナゾール市では、市立公園に一時的に仮設キャンプが建てられました。人々は、手に入るあらゆるもの(鉄板、スレート、合板など)で、仮設住居を作りました。信じがたいことですが、この悲劇の影響は今日まで続いています。何年も経った今でも、官僚的な困難と経済状況により、約1千200人が国から約束された住宅をまだ受け取っていません。現在、当局は住宅費用の月額250ユーロ(約4万5千円)を負担するだけで、残りの半分は被災者自身が支払わなければなりません。しかし残念ながら、地元の給与水準ではそれは不可能です。多くの人にとって、この金額は手の届かない金額です。



大地震後に建てられた仮住居

このため、人々は出口のない状況に置かれています。すでに3世代目がこのような仮設住宅で暮らしている例もあります。特に子どもを抱えた独身女性にとっては、厳しい状況です。



3世代が住む仮住居内

湿気とカビの臭いが、このような場所を訪れたときに最初に気づくことです。長年にわたり、ヴァナゾールのキリスト教会は、このような家族に食料品パッケージを届けて支援してきました。この隣人愛は、福音宣教の架け橋となっています。

10万人以上が仕事と住居を求める

ナゴルノ・カラバフからの難民の状況も同様です。2023年9月、アゼルバイジャンの軍事作戦後、同地域のアルメニア人住民全体の10万人以上が家を離れ、アルメニアへ移動してきました。人々は数日以内に、最小限の所持品だけを持って急いで逃げました。多くの人々が住居、仕事、家財を失いました。全員が車を持っていたわけではないので、「私たちや他の多くの人々はバスでアルメニアに来て、小さなバグー一つしか持っていませんでした」と、ステパナケルト出身のあるクリスチャンは語りました。国は、「住居問題を早くても2027年から2028年に検討する」と約束はしています。現在、子どもの多い家族が優先されています。それまで、どこに住むことになるのか、私たちにはわかりません。

新しい住居と職場の問題は、これらの人々にとって切迫したものとなっています。アルメニアのキリスト教会は、これらの人々に一時的避難所を提供するため、自分たちの施設や部屋を提供しました。彼らが自分の住居を見つけ、教会堂を再建できるかという問題は、未解決で不確かなままです。

信仰は分かち合いに表れる

困窮している人々へのもう一つの愛の奉仕は、アルタシャトのキリスト教会の施設で行われる慈善食事です。現在、9家族から15人の人々がここで温かい昼食を受け取る機会を得ています。ウラジミールと彼の妻は、この重要な奉仕を何年も続けてきました。人々がパンを取りに来ると、彼らは霊的なパンも受け取っていきます。ある人々はキリスト教会に加わり、他の人々は別の場所に移り、キリストの愛と思いやりについて温かい思い出を持っていきます。クリスチャンたちは、この奉仕を続けるためのさらなる経済的支援を祈っています。



教会施設内で、温かい食事を提供する姉妹たち

残念ながら、現在、すべての困窮者に食事を提供することはできません。誰かが引越したり、経済状況が改善したりした場合に備えて、しばしば人々を待機リストに載せなければなりません。理論上では30人から40人分の昼食を準備できますが、そのための資金がまだ十分ではありません。ウラジミールは、「私たちは、言葉だけでなく行動によって人々に仕えることは、神からの召命と考えています」と語っています。困窮している人々にパンを分かち合うことは、キリストに従う者すべての第一の務めです。

宗教ではなく、信仰が人々を変える

アルメニアの働きについて語る際、子どもや青少年の活動を見過ごすことはできません。夏休みで子どもたちが学校に通わない時期、キリスト教会は地域の伝道目的の子どもキャンプを企画します。遊びや楽しみとともに、子どもたちは神の言葉を聞き、それが後に彼らの心の中で実を結ぶこととなります。ほとんどの場合、週末キャンプとして行われ、1日平均20人から70人の子どもが参加します。中にはヤジディ教徒が住む村で開催されるキャンプもあります。アルメニア社会の閉鎖性を考えると、これはまさに貴重な機会です。定期的にキャンプが開催される場所では、もはや十分なスペースはありません。追加施設や建物が必要となっています。貧しい家庭の多くの子どもたちにとって、キリスト教の「子どもキャンプ」への参加は、国内のキリスト教会や西側からの支援によって可能となっています。どうぞ、お祈りください。



子どもキャンプ後に教会学校へ集う子どもたち

(つづく)

私たちはキリスト者であろうと、なかろうと、それぞれの人生の中で幾重にも降りかかる嵐に耐えなければならない時があります。次から次へとやって来る苦しみの中で、時には「なぜ、自分ばかり…」と思うことはないでしょうか。たとえ、まともに生きていたとしても、また、神を喜ばせ、神に従順に歩んでいたとしても、苦しみは人を選ばずに、容赦なくやってきます。この世において傷ひとつ無い人生は、決して存在しません。また、私たちが受ける全ての痛みの意味を知る権利も、私たちにはありません。けれども、私たちキリスト者には、身の回りで起こる物事の背後には、必ず全ての主権者なる神が支配しておられることを忘れてはいけません。ヨブが嵐の中で神を見たように(ヨブ記42:5)、私たちが吹き荒れる風の中で、手を差し伸べて待っておられるイエス・キリストの姿を見るのではないのでしょうか。今月号からは、ヨブのように多くの痛みを負わされ、誰からも慰められずにいた一人の女性が、神と出会い、再生し、神の栄光を輝かせていく— そんな魂の賛歌の記録をご紹介します。

枯れた大地、静まった海

ナム・ウンジュが鴨緑江を渡り、祖国北朝鮮を離れたのは、彼女が25歳の時でした。いつの間にか祖国で生きた年月より、ここ大韓民国で過ごした時間のほうが長くなりました。ウンジュは北朝鮮中部の農漁村で、一男三女の次女として生まれました。彼女の家族は、働き者の労働者階級である平凡な家庭でしたが、農漁業を生業とし、暮らしに困ることはありませんでした。しかし、大飢饉の到来に伴い、これまで収穫の彩りを見せていた大地は枯渇し、燃料や資機材不足で水産業は機能不全に陥り、漁獲量が減った海は静まり返ってしまいました。ウンジュ一家もその煽りを受け、野菜や魚どころか、草の根さえも口にできませんでした。

ある日、食べ物が全く無い一家は、キャベツ1個をもらい受け、お腹を空かせた子どもたちは、そのキャベツを見て、目を輝かせました。湯を沸かして、キャベツを丸ごと茹で、塩などの調味料は一切ありませんでしたが、それでも一家にとっては久しぶりにお腹いっぱい食べられるご馳走でした。ところが、農薬で汚染だらけであったそのキャベツで、家族全員が酷い体調不良を訴え、特に免疫の弱かったウンジュの全身は浮腫となり、しばらくは体を自由に動かすこともできませんでした。束の間の空腹感からの解放は、このような大きな代償が伴うこともありました。しばらくして父が餓死し、家も無く、他人の納屋で暮らしていた一家は、父の葬儀も他人の部屋を借りて、ようやく執り行うことができました。父の死後、母と兄と姉の3人が商売で家を何日も空けることになり、家にはウンジュとまだ幼い妹だけが残されました。彼女は妹の面倒を見ながら、軍人の社宅にある畑の草むしりをし、その報酬として、子どもの拳ほどの飯しかもらえませんでした。そこ



飢饉に苦しんだ子どもたち

で彼女は山の中を這いつくばって草を探し、その草と飯を混ぜてかさ増した粥で食い繋ぎました。姉妹は、そのように細々と生命を維持し続けました。

鬼となった愛する人

ある日、中国国境にある恵山市まで商売に出かけていた兄が、一人でふらりと家に帰って来ました。兄が戻り、心強く感じたウンジュでしたが、疲れて帰って来た兄の横顔に、深い絶望が見て取れました。恵山で商売した後、兄は詐欺に遭い、持っていたお金も商売の元手も全て奪われてしまいました。苦勞しながら行商し、貯めたお金を持って、ようやく帰ろうとした途端、あっけなくお金を失った衝撃と失意を味わいました。そして、なぜ詐欺に騙されたのかという自分に対する腹立たしい感情が、兄の中で止められない激しい怒りとなって爆発しました。その激高の矛先がウンジュに向けられ、兄は彼女に対して、妹の面倒をきちんと見なかったのではないかと、言いがかりをつけ始めました。

兄はこの鬱憤を晴らすかのごとく、鉄棒でウンジュを何度も殴打し続けました。彼女は、兄からの折檻に必死で耐えてはいましたが、殴られる体の痛み以上に、彼女の心は恐怖と悲しみの痛みで満ち、張り裂けそうでした。深い絶望の淵に落とされた彼女は、一筋の光だけを頼るかのように母を思いました。しばらく痛みで起き上がれなかった体が回復するのを待ち、彼女は母を探しに家を出ました。この大飢饉は人から生命を奪うだけでなく、愛する人を鬼へと変えてしまう悲しい現実であることを、ウンジュは身をもって知りました。

何年も待つ約束

ウンジュはようやく母がいると思われる恵山市に着き、恋しかった母に無事に会うことができました。彼女は母に会えた嬉しさがこみ上げ、母も訪ねて来た娘を見て、喜んでくれました。しかし、ウンジュのために麵を一杯買って食べさせてくれた母は、家に戻った兄と幼い妹が気になり、二人の状況を知りたいと、一人で一旦、家に帰ると言い出しました。そして、3日経ったら必ずウンジュのもとに戻る、と言い残して急いで家に帰って行きました。知らない地に一人取り残されたウンジュは不安ながらも、母が3日後に戻って来てくれるという言葉信じて待ちました。しかし、3日経っても、母は一向に戻って来る気配はありませんでした。あの兄がいる家にもう帰れないウンジュは毎日、駅前母を待ち続けました。飢饉で栄養失調状態であった彼女は、病気になるまで死にかけながらも、母との再会を心待ちにして、何とか持ちこたえました。いくら母を待っても、母は帰って来ません。母に約束を破られた裏切りは、痛んでいた心に追い打ちをかけるかのように、深く切り裂いていきました。それでも、ウンジュは物乞いをしながらでも毎日、駅前母を待ち続けていました。母は決して帰って来ませんでした。何年経っても…。

(名前は全て仮名)(つづく)

World View

イスラエル

昨年11月中旬、イスラエル・ハマス間の停戦が決まり、ガザ地区に救援物資輸送車列が航行しています。キリスト教系人道支援組織「グローバル・エイド・ネットワーク」(GAIN)の発表によれば、支援物資はカーン・ユニスの配給センターで配布されています。GAINの責任者クラウス・デーヴァルト氏によると、これまでに140台以上のトラックによる支援物資、合計3千500トンの食料がガザ地区に届けられました。



ガザ地区への救援物資輸送車列

現地では、GAINのイスラエル人パートナーが配給を調整しています。この活動は、アラブ人、イスラエル人、ドゥルーズ教徒、キリスト教徒、イスラム教徒からなる「多文化チーム」で構成され支えられています。

デーヴァルト氏は「これが和解のあり方です。私たちは共に、最も緊急に必要とされている場所に希望をもたらしている。」と述べています。これまでにガザ国境に近い南部のコミュニティーでは、避難住民の約90%が帰還し、さらに2500人以上が可惜に移住しました。GAINは、ガザ地区住民を人道支援するイスラエル当局の許可を得ています。同組織はこの機会を2つの方法で活用している。一つは、イスラエル国内で物資を購入して配布すること。もう一つは、欧州からの輸送を継続することです。GAINによると、ガザ地区の生活状況は極めて困難です。インフラはほぼ完全に破壊されており、医薬品が不足している。GAINは宣教団体「キャンパス・フォー・クライスト」の人道支援パートナーでもあります。お祈りください。

ナイジェリア

ナイジェリアにおけるキリスト教徒への迫害は、昨秋から特にエスカレートしてきました。特に、人権専門家たちは、ナイジェリアにおけるキリスト教徒迫害は軽視してはならないと、警鐘を鳴らしています。ドイツの日報紙「フランクフルター・アルゲマイネ」(FAZ)によれば、彼らの問題はキリスト教徒農民とイスラム教徒牧畜民との対立という見解です。しかし、あるナイジェリア人権弁護士は、「イスラム教過激派組織フラニ民兵によって、キリスト教徒の村落への夜間虐殺が発生し、そこでは集落の放火や、住民が射殺される事件も発生している。」と報告しています。また、国際援助宣教団体「オープン・ドアーズ」も同じように、述べています。西側の観察者でFAZ紙は、ナイジェリアの暴力的、宗教的実態を正しく伝えていないと、強調しています。ナイジェリアは、他のどの国よりも多くのキリスト教徒が殺害されている国です。どうぞ、お祈りください。

イラク

何十年もの間、イラクではキリスト教徒、ヤジディ教徒、その他の宗教集団は、政治的不安定の中、テロと戦争の影響と闘ってきました。復興にもかかわらず、多くの人々には国に留まる展望がありません。オikos財団のダビデ・ミュラー氏は、なぜ状況がこれほど複雑なのかを次のように語っています。

イラクでは、若者たちは未来に投資する一方で、特にキリスト教徒やヤジディ教徒たちは国を去ることを考えています。彼らの多くは、未来への展望のなさ苦しんでいるからです。彼らの地域は今日に至るまで民兵組織、政治的に対立し、治安が悪くなっています。他の集団は、より多くの保護や経済的機会を得ています。この不平等は国全体に

広がっています。状況は複雑ですが、政府は公的には多様性の重要性を強調しています。しかし、多くの分野で少数派の声は弱く、構造も脆弱で、責任はしばしば回しにされています。これがキリスト教徒、ヤジディ教徒、マンダ教徒、カカイ教徒にとって予測不可能なものにしています。イラクは傷ついた国です。何十年もの独裁政権と戦争が続き、テロが信頼や社会制度、社会的結束力を深く損なってきました。

「イスラム国」(IS)の前後で、多くのことで変わったことも、またほとんど変わらないこともあります。確かに都市は再建されつつありますが、ISのイデオロギーは完全には消え去ってはいません。それは恐怖と不信のムードの中で、生き続けています。和解はあるとしても、小さな一歩でしょう。キリスト教徒とイスラム教徒が共に学校を建設し、ヤジディ教徒の女性たちがトラウマを克服し、村の長老たちと再び対話するといった取り組みです。しかし、これらのプロセスは全く脆弱で保護を必要としています。

これらすべての亀裂にもかかわらず、私はマイノリティを単なる犠牲者としてではなく、架け橋の建設者として働いていると考えています。キリスト教徒は隣人のために、福祉活動や政治活動に従事しています。ヤジディ教徒の活動家たちは犯罪を記録し、学習センターを開設しています。小さな宗教コミュニティは自らの遺産を守り、宗教の自由は抽象的な原則ではなく、尊厳をもって生きる権利であることを思い起こさせています。

決定的な問いは、誰がイラクの人々を支えるのか、誰が彼らに支援を与え、留まって自国の形成に参加できるようにするかです。どうぞ、イラクの勇気ある人々のために祈り、そして彼らの活動を経済的に支援してください。建物のた
シリア正教会、モア・マッティ修道院の礼拝
めだけでなく、信頼を築き、傷を癒し、対話を可能にするプロジェクトのために、お祈りください。イラクは傷ついた国ですが、多くの可能性に満ちています。多くの違いを超えて可能性が開花するかどうかは、今後の大きな課題です。皆様のとりなしの祈りが、彼らの和解を実現させます。



中国

国際人権協会(IGFM)とキリスト教出版社IDEAは、「1月の囚人」として、福音派の「シオン教会」の創設者である金敏麗(ジン・ミンリー)牧師(56歳)を指名しました。同師は昨年は10月10日に逮捕されました。そして同教会の他の牧師や職員も投獄されたり、自宅軟禁を命じられたりしました。全体で7都市において30人以上のキリスト教徒が、捕えられました。彼らはインターネットを通して、違法な宗教情報を流し拡散したとされ非難されています。



金敏麗(ジン・ミンリー)牧師

金敏麗牧師は2007年に北京において、この「家の教会」を設立しました。現在、40以上の都市で数千人の信者がいるほどに成長しましたが、国家に登録されていません。「シオン教会」に対する共産主義政権の取り締まりは、近年の中国におけるキリスト教徒を対象とした最大規模の逮捕の波の一つと言われます。10月に拘束された者の一部は、その後釈放されました。しかし、大半の人たちの釈放には保釈金支払いが条件とされています。2018年、同教会は活動を禁止され、創設者の金敏麗牧師は自宅軟禁下に置かれました。IGFMとIDEAは、中国の習近平国家主席に宛てた書簡を通じて、金敏麗牧師の釈放を求めるよう呼びかけています。そして、世界中のキリスト者に拘束されている聖徒たちのために祈るよう要請しています。人口約14億人のこの大国は、推測ですが約9%がクリスチャンと言われます。どうぞ、祈り覚えてください。

オーストラリア

12月14日、犯人たちはユダヤの祭り「ハヌカ」の祝賀会参加者に発砲しました。15人が死亡し、通行人で果物売りのアーメド・アル・アーメド氏(43歳)は、勇敢にも襲撃者の一人から武器を奪い取りました。その際、彼自身も撃たれ負傷しましたが、彼の勇敢な行動は世界中に拡散しました。その後警察は2人のうち年長の男を射殺し、年少の男は負傷しました。この事件は、単にユダヤ人だけでなく世界中に衝撃を与えました。警察の発表によれば、容疑者は父親(50歳)と息子(24歳)で、パキスタン出身でした。「イスラエルの側に立つキリスト者」(CSI)は、「卑劣なテロ攻撃」に衝撃を受けたと表明しました。さらに「このテロ行為は深い眠りについている西側社会と、政治指導者たちに対する更なる警鐘であり、ついに目を覚まして行動すべきだ。」と主張しています。



シドニーでの事件現場

心理学者でありイスラム専門家のアフマド・マンズール氏は、フェイスブックでドイツからのユダヤ人の大量流出に警鐘を鳴らしました。シドニーでの事件と他国での以前の事件は、真空状態で起きたのではないといいます。原因と触媒として彼は、「過去2年間、かつてタブーだった物語を正常化してきた極左とイスラム主義者の過激化した声」を挙げました。ドイツ・ユダヤ人中央評議会のヨーゼフ・シュスター議長は、祝日を選んで無防備で無力な人々を殺害することが、反ユダヤ主義テロの典型的なパターンだと述べました。ドイツ福音主義教会(EKD)の評議会議長であるキルステン・フェールス司教は、オーストラリアのユダヤ人コミュニティへの襲撃を「忌まわしい事件である。あらゆる形態の反ユダヤ主義を最も強い言葉で非難する。一今日も、そして将来も」と叫び声を上げています。反ユダヤ主義のテロ行為のため、お祈りください。

ミャンマー

ミャンマーでは、北部のカチン州のキリスト教徒はクリスマスの祝祭を前倒しで行わなければなりません。この国を支配する軍事政権は、12月28日から始まる選挙との衝突を避けるため、イエス・キリストの誕生を祝う行事を遅くとも12月20日までに行うよう命令を出していました。違反者は「政府命令への不服従」または「反乱」の罪で逮捕される可能性がある、キリスト教支援団体CSWが報じました。その恐れから、多数のキリスト教徒たちはこの命令と要求に従ったようです。影響を受けたのは、キリスト教徒が多数を占める州のミッチーナ、プータオ、タナイなどの都市でした。CSWのマーヴィン・トーマス代表は、この命令は宗教の自由に対する重大な侵害と呼んでいます。これは2021年2月の軍事クーデター以降、初の選挙となります。混沌とするミャンマー情勢、クリスチャンと教会を祈り覚えてください。

英国

英国の競売会社「クリスティーズ」(ロンドン)が、1千年以上前の福音書を競売にかけました。売却額は、換算で100万ユーロ(約184億円)で落札されました。この聖書は10世紀の四福音書の写本集です。「クリスティーズ」によれば、この写本は「ここ数十年で最も重要な写本発見の一つ」であるそうです。作品はエッセンの女子修道院に由来し、そこで筆写されたものと思われます。そして、過去100年間でこの時代の福音書が売りに出されたのは、10点未満であり、女性の写字室との関連が証明されたものは一つもなかったとのこと。



競売にかけられた手書き福音書

オークションハウスの広報担当者シャルロット・デ・ラ・トゥール氏も、キリスト教ニュース・プラットフォーム「プレミア」(ロンドン)に対し、この書の歴史的重要性を強調しています。この聖書は、この時代に女性がこの分野で活動していたことの証拠であり、専門家は、2人の女性がこの写本の制作に携わり、その完成には恐らく数年は要したと考えられると語っています。9世紀半ば頃に設立された女子修道院エッセンからの作品ですが、後に同名の都市が生まれました。

編集後記

- 一年で最も寒い季節となりましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。いつも祈り、ご支援くださりお礼を申し上げます。主の恵みによって、今号をお届けできる幸いに感謝します。
- 日本では在留外国人は395万人を超え過去最多を更新し、日本人と外国人が共に暮らす時代に入りました。2040年には人口の1割が外国人となると言われますが、その方々にキリストの福音を伝える機会が増すことになります。時が良くて悪くても、私たちはすべての民に福音を伝えましょう。
- 米国NY市長に、ウガンダ生まれのインド系移民でイスラム教徒である市長が誕生しました。もはやグローバル化の波は止められませんが、キリストの福音がその波に乗りさらに宣べ伝えられるよう祈り願っています。平安



ミッション・宣教の声
The Voice of Mission

発行人 黒田禎一郎
年間購読料 ¥2,500(送料込)
1981年12月初版発行(毎月1回1日発行)

〒541-0041 大阪市中央区北浜2-3-10 VIP 関西センター 5F
TEL 06-6226-1334 FAX 06-6226-1336
E-mail senkyo@vomj.jp URL http://vomj.jp/

The Voice of Mission
MUFG Bank, Ltd. Sakaihigashi Branch
Bank account No.3623132 SWIFT CODE : BOTKJPJT



■郵便振替口座 00940-3-301623
■銀行口座 三菱UFJ銀行 堺東支店(店番205)
普通口座 3623132「ミッション宣教の声」

Bank Address : 59-2 Mikunigaoka-Miyukidoori, Sakai-ku, Sakai-shi, Osaka-fu 590-0028 JAPAN TEL:81-72-221-3041